大阪市立大学『人権問題研究』3号,2003,pp.99～111　ISSN1346－454X

チッタゴン市におけるハリジャンとヒンズー・ベンガリとの関係

野口道彦*

1　はじめに

2002年12月14日から30日にかけてバングラデシュで現地調査を行った[1]。今回は、日本側から私一人の調査となり、共同研究者であるチッタゴン大学イフティカルU.チョドリー博士[2]の協力を得て行った。これまでは、チッタゴン市の清掃カーストの人々が住む最大の地区BSCを中心に調査してきた。今回の調査のねらいは、それに加えてJSC,MSC,FSCの3地区のsweeper colony（以下SCと略称）を調査し[3]、それらの地区がBSCと社会的性格を異にするものかどうか、BSCとどのような関係をもっているのかを把握すること、また前回の生活実態調査では十分に把握しえなかったトイレ清掃の実態を把握すること、さらにSC内部のサブ・カースト構造を探索することなどを課題とした。

これまでの2回の調査は、SCという鉱脈を掘り当てたものの、まだまだ手探りで部分的な断片しかみていなかった。しかし、今回3回目の調査で、ようやくチッタゴン市のSCの全体像がみえてきたという実感をもつことができた。その点で、今後、清掃労働者をめぐるエスニック関係を解明する上で貴重な示唆が得られるものであった。データは、まだ未整理な段階であるが、とりいそぎフィールド・ノートというかたちでまとめ、今後の研究の方向を定める上での議論の素材としておく。なお、今回の調査では現地の清掃労働者の方々、チッタゴン市長はじめ職員の方々など、多くの方のお世話になったが、とりわけ調査助手を勤めてくれたHoque Kaledaさん、Dastigar Anisさんに感謝したい[4]。

2　ヒンズー・ベンガリの発見

これまで、SCにはいわゆる清掃人カーストといわれる人たちだけが住んでいると理解していた。しかし、今回の調査では、SCにはヒンズー・ベンガリと呼ばれる人たちが居住していることがわかった。ヒンズー・ベンガリとは、どのような人であろうか。一般には、ベンガル地方に居住するヒンズー教徒をいう。その中には、バラモン、ボイショなどの上位カーストをはじめ、さまざまなジャティの人たちが含まれる。しかし、今回の調査で出会ったのは、A）清掃労働に従事するヒンズー・ベンガリ、B）清掃労働に従事し、かつSCに住むヒンズー・ベンガリである。

今回も、チッタゴン市雇用の清掃労働者数を調べた。分類は、ヒンズー教徒、イスラム教徒、仏教徒としてデータを求めた。報告された結果は、第一表のとおりである。私は、「ヒンズー教徒」は、すべて清掃カーストに属する人々であると勝手に思い込んでいた。

表1：チッタゴン市雇用の清掃労働者数（宗教別）

	ヒンズー教徒	イスラム教徒	仏教徒	計
常雇	436	284	2	722
臨時雇	770	362	2	1,134
計	1,206	646	4	1,856

2002年1月現在[5]

ところが後日、Baghmoniram区で現場監督をしているRUさんが教えてくれた清掃労働者の構成は、イスラム教徒18人、ヒンズー教徒21人、ハリジャン22人であった[6]。驚いたことに、ヒンズー教徒とハリジャンが分けられていた。メモには、ベンガル語でMethorと書かれている。Methorは清掃カーストを意味するカースト名である。Methorとヒンズー・ベンガリとは明らかに区別されている。職員証にもMethorと書かれているから、ある種の身分を示すカテゴリーとして公的に使われている。Methorとヒンズー・ベンガリとはどのように違うのだろうか。根掘り葉掘り尋ねたところ、違いとしてあげられるのは、ヒンズー・ベンガリはベンガルの土着であるのに対して、ハリジャンはインドからの移住者であるという点である。インドからの移住の経緯については後で詳しく述べるが、清掃労働に従事しているヒンズー・ベンガリは、どのようなジャティに属しているのだろうか。この質問に対して、現場指揮官（Superintendent）のAKさんは、Sen, Jolodas, Nath, Palなどのジャティ名をあげた。彼らの清掃労働への参入の理由として、失業に苦しんでいたこと、トイレの清掃だけではなく、道路の清掃などの仕事が増え抵抗感が少なくなったことなどをあげた。パキスタン時代には、清掃労働へのイスラム教徒やヒンズー教徒の参入はほとんどなく、バングラデシュ独立後に徐々に始まったという。そのなかには、Karmakar（鍛冶職人）、Sarnakar（金細工職人）、Shil（散髪職人）、Dhopa（洗濯職人）、Chamar（Muchi、靴職人）などの人たちがいるという。イフティカル博士は、AKさんと話をしながらジャティのリストを作ってくれた。これらの人々は、インドでは登録カーストとされている。そのようなジャティの人々であるならば、いわゆる被差別カーストに属する人たちが大半であろう。

Baghmoniram区の清掃労働者の構成比率をみると、ヒンズー・ベンガリとハリジャンとイスラム教徒はそれぞれ3分の1づつを占めている。これが、チッタゴン市の清掃労働者全体に当てはまるかどうかは、まだ確認していないが、ヒンズー・ベンガリの人たちがかなりの比重をしめていることは確かである。

さらに、ヒンズー・ベンガリは、SCに居住している。その比率は、BSCではあまり多くはなさそうである。JSC（70～80世帯）やFSC（32世帯）には、ヒンズー・ベンガリは居住していない。しかし、MSCの全世帯数は86世帯であるが、そのうち25世帯（29%）はヒンズー・ベンガリである[7]。かなりの比重をしめている。清掃労働に従事しているヒンズー・ベンガリがすべてSCに居住しているとは限らないが、幾人かはSCに居住している。

このことに気付いた私が、ヒンズー・ベンガリのことを聞くと、SCの住民同士の間でも「私たちはハリジャンである。彼らはヒンズー・ベンガリで、私たちとは違う」といい、別のカテゴリーと認識されていることがわかった。

ハリジャンは、いうまでもなくガンジーが名付けたものである。「神の子」の意味である。しかし、インドではハリジャンという呼び名を嫌って、最近では「ダリッド（虐げられた人々）」と自らを呼んでいる[8]。一方、チッタゴンでは、インドの被差別カースト解放運動のことはまったく知られていない。ポジティヴなイメージで

自らをハリジャンと今でも呼んでいる[9]。またインドでは、被差別カーストを総称するカテゴリーとしてハリジャンが使われたのに対して、チッタゴンではインドから移住してきた清掃人カーストにだけ限定されているようだ。

このようなことを考えると、ハリジャンというカテゴリーもよく吟味して使わなければならない。ハリジャンがインドの登録カーストに相当し、ヒンズー・ベンガリは、それ以外のカーストの人々という図式ならわかりやすいが、そうではない。バングラデシュでは、はたして被差別カーストという集合的カテゴリーがあるのか慎重に検討してみる必要がある。インドと同じではなさそうである。チッタゴンの現市長は、sweeperに代わる言葉としてShebokを推奨している[10]。Sweeper、Shebok、Methor、ハリジャンなどのカテゴリーは、たがいに重なり合いながら、少しずつ、ずれている[11]。

写真① BSCの5、6階が増築された住宅棟（正面）

3　カンプールからの移住：BSCの起源

BSCの長老KPさんは、BSCの司祭である。Panditは僧侶という意味であるが、Pandaは、正式な資格をもつ僧侶ではないが、民間で教典を学び宗教儀式を行う世俗の僧である。KPさんは、Pandaと呼ばれ尊敬を集めている。彼自身、父の跡を継ぎ6歳の頃からサンスクリットの勉強をし、菜食主義を守り神に仕えるものとして戒律をまもってきた。KPさんは、夜学校の教師をするBKDさんの父である。

KPさん（87歳）からカンプールから移住の経緯を聞いた。1910年頃、最初にインドからこちらに移住して来たときの初代のリーダは、Rampoashad Jamedarである。1度に40～75人ぐらいがきた。KPさんの父、Badlu Jamadarは、2代目のリーダで、1915年頃に移住して来た（Jamedarは監督の意味である）。KPさん自身は、BSCのすぐ南のPatherghataで生まれた。KPさんによると皆はカンプールから来たと言っているが、正確にはUttar PradeshのBalda Zilla（県）、Hamirpurから来たという。Berbanti川とJamune川の間にあるHamirpurにBalda駅があるが、そこを利用せずにカンプール駅に来て、そこから汽車に乗ってチッタゴンにきたので、皆はカンプールから来たといっているのだ。

KPさん自身、日英戦争の後、20～25歳の頃に父と一緒に故郷に戻り、移住者を募り、75人をチッタゴンに連れてきた。Goalanda駅から船で、Chandpurに来て、それから鉄道でチッタゴンに来た。途中、父は、汽車に乗っている時に腹巻きにいれていた金をスリに盗られかけた。腹巻きは、ナイフで切られ、金は下に落ちて、皆が気づいてくれたので、無事だったと身振り手振りで話してくれる。

当時はイギリス政府の植民地化であり、移動

はたやすかった。イギリス政府は3年間働けば1ヶ月の有給休暇をつけて故郷への帰省を約束してくれた。政府の約束したことは、その他に1）住宅、2）米、麦、油、砂糖など食料の割引制度、3）妊娠中の食料の支給と3ヶ月の休暇などである。当時の賃金は、男12ルピー、女9ルピー、監督16ルピーだった。

今も、市に要求する根拠は、この歴史的経緯に基づいている。市が仕事と賃金、住むところを保障して当然だという主張の背景には、このような入植時の政府との契約が彼らの記憶としてしっかりと刻まれ、語りつがれている。

チッタゴンは当時、自治体（municipality）で、今の市長に相当する自治体の議長は、ヒンズー教徒であった。名前は覚えていないという。このBSCの場所は、もともとヒンズー教徒の火葬場・墓地であり、地主は、ヒンズーの金持ちRamprashad Kedarnath（Zamindar、地主）であった。市は地主に無断でそこに家を建てて住まわせたが、自分の土地に勝手に清掃人たちが住んでいるのに気づいた地主は、暴力団を雇って家を壊し、追い出しにかかった。住民たちが市に訴え、市がRamprashad Kadernathと交渉をした。その結果、地主は市に土地を寄付することになり、その交換条件として、市が家を建て、無償で清掃人たちに住まわせることを約束させた。

その時の契約書をもっていた地区のリーダIshwaria Master（Sarder）は、死亡する前の1950年頃、その書類を息子に命じて燃やさせたという。なぜ、そうしたのかよくわからない。頭がおかしくなったのかもしれない。その結果、その土地が彼らのために、市に寄付されたという主張を根拠づける契約書は残っていない。この文書騒動については、KPさん自身は、その文書をみていないので、確かなことは何も言えないという。数年前になくなった初代の移住者であるRampoashad Zamedarからの伝聞だとして積極的に話したがらない。

BSCの位置は、チッタゴン市の中心部、裁判所のすぐそば、Katwali警察署の横にあり、市の人口密集地域にある。KPさんの記憶にある初期の頃のBSCは、70～80家族が仮小屋に住んでいた。境界の壁のようなものはなかった。ほかにも、清掃人たちはチッタゴンのあちこちに散在しており、その場所は、1）Patharghata、2）Murgihat、3）Boxirhat、4）Dampara、5）Hazarigali、6）Jhoatala、7）Pahartali、8）Kadamtali、9）Sadarghat、10）Namuna Bazar、11）Majhirghat、12）Fringhee Bazar、13）Antumanghatなどであった。最初にできたのがBSCであるが、その次にJSC、MSCの順にでき、もっとも新しいのがFSCである。

さて、カンプールから来た人たちは、どのような人たちであったのか。KPさんの話では、カンプールではDumar、Basur、Hali、Jad、Rahutなどと呼ばれる人たちであり、カンプールではMethorと呼ばれていなかったという。パキスタンの時代にMethorと呼ばれるようになったのであって、自分たちはそのような捉え方はしていない。

Methorと呼ばれた時代は、ホテルにも喫茶店にも入ることができなかった。今は、Shebokであり、喫茶店でもホテルでも入れる。時代の状況と重ねてとらえられている。Methorという呼び名は、「感じが悪い」というが、その呼び方に強い反発をもっているわけではない。自分たちは、Methorだと思っていないなら、なぜ、それに抗議をしなかったのかという質問には、「市は近々Shebok という言い方に変え、職員証を発行しなおすというから、それでいいじゃないか」という受け止め方である。Methorというジャティ名をめぐるアイデンティティのあり方の分析もこれからの課題で

ある。

4　従業員住宅としてのSC

市住宅局長の説明によると、SCは、基本的には市雇用の清掃労働者のための従業員住宅団地という性格をもつ。その居住者はハリジャンが多数を占めるものの、身分的なゲットーではない。入居資格者は、あくまでの市雇用の清掃労働者である。これはKPさんが語るハリジャンのための身分的な居住空間であるとするBSCの歴史的経過と異なる。清掃労働が、すべてハリジャンによって独占的かつ差別的に担われている時は、この矛盾は露呈しなかった。しかし、失業者が大量に存在する都市部では、安定した市雇用の清掃労働者のポストが魅力的になり、イスラム教徒やヒンズー・ベンガリが清掃労働へ進出してくると、矛盾が表面化する。

ハリジャンでも清掃労働者になれないものが多量に生まれる。そのような人は入居資格をもたない。また、退職すると住宅を明け渡さなければならない。家族の誰かが市雇用の清掃労働者であれば、その家族の住宅入居は継続される。市の規則では、退職後、住宅を明け渡さない場合は、当然支払われるべき年金の支給がストップされることになっている。SCの4地区のどこでも、強く訴えられていたのは、「退職後も引き続き住宅に住めるようにしてほしい」という切実な要望である。

住宅局長も、ハリジャンに対する居住差別があり、SCから他に転居するとしても、それは容易でないと認識している。また、SCの住宅の戸数が限られているから、臨時雇にまで入居資格を広げることはできないという。一方、SCの住宅には、ベンガリ・ヒンズーもイスラム教徒も入居を希望すれば認めざるを得ない。そのようなことで、一部のSCには、ベンガリ・ヒンズーが入居している。それが当該のハリジャンたちからどのように受け止められているのだろうか。

写真② 右側の住宅の一棟だけな小さなJSC

5　SCに居住するヒンズー・ベンガリ

SCに居住するヒンズー・ベンガリは、どのようなアイデンティティをもっているのだろうか、ハリジャンとの関係を見てみよう。3人の場合を紹介する。その一人の女性ADさん（45歳）、額に赤いシールを貼っている。常雇の清掃労働者である。賃金は3,700Tk。ここで生まれた。夫は臨時雇のゴミ運搬車の作業員である。母を紹介し、しきりにその話を聞くようにすすめる。母は80歳でかなりもうろくしている。BSCに住むようになったのは、母が若いころ、イギリスから独立したころだという。かなり長い居住歴である。

母のきょうだいは、このBSCに住んでいるが、父方のきょうだいはすでに死んでしまったのか、ここには住んでいない。夫が建てた仮小屋（Kucha）に住み、地代として市に月180Tkを払っている。

何家族のヒンズー・ベンガリがBSCに住んでいるのかを尋ねてもはっきりした答えはもどっ

てこないが、仮小屋の集まったBSCの北東の一角では4家族が住んでいるという。

ハリジャンたちとの付き合いのしかたを聞く。「ハリジャンたちとは、うまくやっている。食事に招待されることもあるし、食事に招待することもある。付き合いをしていく上では、何も問題はない。この地区のお寺の祭りにも参加しているし、お寺の役員もやっている」という。この家族は、このコミュニティーにとけ込んでいるようだ。このようなインタビューをしている間も近所のハリジャンの女性や子どもたちが親しく声をかけてくる。

しかし、もう一人のヒンズー・ベンガリのBDさん（40歳）の話は、まったく違っていた。彼の父はPatiya出身で農業労働者であった。BDさん自身は、20歳の時に清掃労働者になり、現在は常雇の清掃労働者（溝掃除の担当）である。彼の兄弟も清掃労働者でBSCに住んでいる。2人の息子と1人の娘がいる。彼の賃金は4,000Tkで、1,000Tkを電気代、家賃、ガスの支払いにあて、残りの3,000Tkで家族をやしなっている。現在は仮小屋に住んでいるが、近く建設される住宅棟が完成したらそこに移る予定。彼はヒンズー・ベンガリというアイデンティティをしっかりと持っている。ここでは、他のハリジャンとは、宗教が同じなので、まったく問題なく暮らしていると言う。そこで、単刀直入に子どもがハリジャンと結婚するという話になれば、どうするのかと質問すると、「自分の娘が他のハリジャンと結婚をするのは絶対に許さない」という。どうしてなのかと尋ねると「これは感情の問題なのだ」とはっきり言う。では共食について、ハリジャンの結婚式に招待された場合、それに参加するのかと尋ねると、「参加するが、そこでは食事は一緒にしない。自分もハリジャンを家に招待しない。食事をする場合は、外で一緒に食事をする」と、極めて厳格なルールを自分に課している。誰かにそれを見られるからダメなのかと尋ねても、「個人の問題だ。自分はそのように考えているのだ」という答えである。

ヒンズー・ベンガリが25世帯住んでいるMSCで、ヒンズー・ベンガリの70歳のBAさんに話しを聞く。白髪で仙人のような風貌の人だ。ジョロダス（漁民）の出身で、30年前からここに住むようになったという。ジョロダスも被差別カーストの一つである。以前は、コックス・バザールに住んでおり、そこでは日雇仕事をしていた。チッタゴンに移って溝掃除担当の市従業員をしていたが今は退職している。

ハリジャンとの付き合いを聞く。まったく問題なく付き合っているという。念をおして、「もし、ハリジャンの近所の人があなたの娘と結婚させたいと言ってきたらどうするのか。あなたの子どもが、ハリジャンと結婚したいと言ったらどうするのか」と質問したところ、「まったく問題ない、相手がよければ、結婚しろとすすめるよ」という。「神が人間を作ったのだから、みんな同じだ」というのが、彼の考え方である。

写真③ MSCの広場で遊ぶ子どもたち

このように3人のヒンズー・ベンガリは、三人三様の考え方である。BDさんのような伝統的な価値観をもっている人は例外的な存在なのだろうか、それとも日常生活の表面的な付き合いの背後にまだ強固な障壁が隠されているのか、少ない事例からは一般化できない。これは、職業と身分（ジャティ）との関係を解明する重要な切り口である。

6 隔離された西棟

BSCは東西300フィート、南北180フィートの長方形であるが、その西側の一角には、4階建の住宅棟がある。その住宅棟は、以前から気になっていた。BSCの敷地内からは、どこからもそこへ行く通路がない。西側の道路からしか入れない[12]。BSCの敷地内であるが、このコミュニティーには属していないという奇妙な関係にある。4階建で、1フロアーに8世帯、計32世帯が住む。この住民は、市に雇用されている。その構成は、ヒンズー・ベンガリ26～27世帯、ハリジャン1世帯、イスラム教徒4～5世帯である。ハリジャンは、この棟では少数派である。イスラム教徒は、市に雇用されており、道路の際に置かれている花壇や植木の世話をする担当だという。

3階の3軒ほどの戸口に南京錠がかけられている。生活の臭いがない。どうしたのかと聞くと。「今、仕事にいっていて留守なのだ」という。あとから考えると、家族員の多いバングラデシュでは家族全員が留守なのは極めてめずらしい。誰かは家にいてもいいはずだ。何か奇妙だと思った直感はあたっているのかもしれない。住宅は確保しているが、使用していないのか。転出して今は空き家なのか、何か理由があるはずだ。

階段をあがっていると、子どもを叱っている若い母親と出会う。話かけてみると、イスラム教徒である。彼女の許しを得て、居室に入って話を聞こうとすると、BSCの青年で案内してくれているBKDさんが、「ダメだ、帰ろう」と制する。興味深い入居者なので、話を是非聞きたいと思ったので、私は彼の制止を無視して、なかに入って話しを聞いた。

彼女は26歳で、夫は会社員。2人の息子と1人の娘がおり、母と同居している。以前は、Patenga海岸公園の近くに住んでおり、7年前にここへ引っ越してきたという。この住宅への入居資格を聞くと、母が市職員で看護婦をしているといい、母の身分証明書をもってきて見せてくれた。

驚いたことにBSCの人たちとは付き合いをしておらず、この住宅棟の他の家族とも付き合いがない。子どもは、BSCの北西の一角にある小学校には行かせていない。「そこはハリジャンばかりで、子どもの教育にはよくないので、市場の近くにある小学校に行かせている」という。露骨にハリジャンとの関係を断絶して生活している。彼女は、この住宅棟の例外的存在なのか、それとも象徴的存在なのだろうか。

四階にあがると、女性がしきりに「部屋を見てくれ」と訴えかけてくる。彼女に引かれるように部屋に入ると、天井が雨漏りを防ぐ布で覆われている。その隙間からみえるモルタルの天井はボロボロにめくれている。よほどひどい材料を使って手抜き工事をしたのだろうか。BSCの中心部の住宅棟も、外壁が劣化し、水に濡れた段ボールのようにモルタル壁が崩れている。

この住宅棟の屋上にも上がって写真も撮り、MSCへ移動しようと車に乗り込むと、BKDさんとBSCのリーダーのCLさんが怒っている。西棟の家族を訪ね、話を聞いたことが、彼らを怒らせているのだ。「彼らはBSCの人ではない。われわれと付き合おうとしない。話を聞く必要

もないのに、なぜ行ったのだ」というのだ。調査助手のアニスが「調査に必要だと思ったから、話を聞きに行ったのだ。それを理解してほしい」と説明しているが、怒りは収まる様子がない。一緒にMSCを訪問する予定だったBKDさんも、車に乗ろうとしない。BSCをめぐる複雑な人間関係、政治力学がそういわせているのだろう。今回の私の行動は、BSCの内部に潜む隠された対立構造を浮かびあがらせたのである[13]。

7 隠されたトイレ清掃の労働者

前回の2000年のBSC生活実態調査では、予想に反してトイレ清掃に従事する人は極めて少なかった。有業者314人のうち清掃関係の従事者は296人を占めたが、そのうち「トイレ」の清掃はわずか11人(男性8人、女性3人)であった[14]。清掃カーストが、被差別カーストの中でも最も忌避されるのは、汚れ仕事であるトイレの清掃に従事しているからだというのが一般的に流布された言説である。では、なぜBSCではトイレ清掃従事者が少ないのか。この謎について、前回、仮説的に3つの場合を提示した。第一の仮説は、BSCが市雇用の従業員住宅という性格を強くもつため、民間部門で担われる家庭のトイレ清掃従事者が住めなくなっているのではないか。第二の仮説は、トイレ清掃は、他の地区によって担われている可能性である。第三の仮説は、トイレ清掃は副業形態であるため、主な職業の一つについて回答するように設計した調査票では、回答から漏れ落ちてしまった可能性である。

今回の調査の目的の一つは、これを明らかにすることであった。まず、他の地区の人々によって担われている可能性の検討である。基本的には、BSC、JSC、MSC、FSCの4つの地区は、職種、就労形態において同質的であり、いずれかの地区がトイレ清掃をもっぱら分担しているという傾向は認められなかった。市雇用の清掃労働者の住む地区であること、市の建てた2階建、3階建の集合住宅が主体をなしていること、カンプールからの移住であるという起源が共通に語られること、一般の小学校。中学校に通わず地区内の夜間小学校に子どもたちが通っていることなど、共通点は多い。さらに、BSCとの通婚関係をもち、葬儀などにも参加するという密接な関係をもっていることなど同質性は高い。したがって、第二の仮説は棄てられる。

すでに述べたように、BSC、JSC、MSC、FSCは、市に雇用された清掃労働者のための住宅地という性格をもっている。住宅が足りないために、自前で仮小屋を建てているものがいるが、土地は市有地であるから、地代を市が徴集している。そのような持ち家や借家・借間が一部にはあるものの、基本的には市の従業員以外は住みにくい。

そうだとすれば、市が直接雇用しているトイレ清掃労働者はどれぐらい存在するのか。この点をあらためて保健局管理部長（Conservancy Chief Officer）SMKさんに尋ねた。表のフォーマットをこちらから示し、そこへ従業員数を記入してもらった。表には「トイレ清掃」という欄を設けておいたが、その従事者はゼロであった。

表2：職種別宗教別清掃従業員数

	ヒンズー教徒	イスラム教徒	仏教徒	計
下水溝清掃	486	262	2	750
市場清掃	35	16	—	51
街路清掃	432	290	2	724
トイレ清掃	—	—	—	—
ゴミ運搬車作業員	245	86	—	331
計	1,198	654	4	1,856

2002年1月現在

7-1 公衆トイレ

従来は、公共的なトイレを市が直接清掃していたが、現在は行っていない。公衆トイレを民間業者への委託方式に変えたためである。前の市長時代に公衆便所は、10～12ヶ所であったが、現市長になって、市場、駅、公園、輸出特区（Export Processing Zone）など市内各所55ヶ所に増設した。それは有料トイレであり、利用者は小便用1Tk 、大便用2Tk、シャワー3Tkを入口で払う。請負業者は、トイレの清掃、維持管理を行い、料金は業者の収入となる。請負業者は、入札で決められ、1年間の契約である。入札価格は、場所、容量によって異なるが、15万Tkから20万 tk。請負業者は24業者。請負業者の数は制限されていて、新規参入は難しいらしい。

このようなシステムに変えたために、市雇用の清掃労働者でトイレ清掃を担当するものは公的にはゼロとなっている。

7-2 トイレの清掃の話

BSCで、トイレの清掃に従事している人に集まってもらって話を聞く。KDさん（35～36歳）。8年間市の常雇として働いている。それ以前は、個人の家の浄化槽の清掃をやっていた。

常雇の仕事を得るときに、2万Tkの賄賂を市の役人に払った。金は高利貸しから借り、利子が1万Tkで、合わせて3万Tkの借金を抱えた。月に500から1000Tkを返しており、そのために生活が大変だ。給料をもらっても、残るのは600Tk程度で、それで家族を養うのは大変だ。

BSCでは、何人ぐらいがトイレの清掃に従事しているか、という質問には、「男性なら、ほとんど全部がトイレの清掃をしている」と答える。

DLさん（30）は、17年間清掃の仕事をしている。「随分若いころからだね」というと、彼は立ち上がって、家から若い時の写真を貼った身分証明書を持ってきてくれた。大事に残しておいたものだ。彼が、仕事を始めた頃は、オープン・トイレが沢山あり、3時に起きて、竹の背負い棒の両側にバスケットをぶら下げ、それに糞尿をいれて運んだり、猫車にのせて運び、溝に棄てたり、トラックに運んだりした。受け持ちの範囲は、Patherghata区とFringhee Bazar区であった。このような形態の作業はなくなった。3ヶ月の試用期間のあと、すぐに常雇になった。BSCからフリンジ・バザール区の詰め所に行き、そこから仕事の現場に行った。

DLさんは、7年ほど前から、下水溝担当になった。溝に溜まっているゴミを道の上にあげ、それを猫車に載せ、トラックまで運ぶ（写真参照）。5時に起床。6時にLalkhan Bazar区の詰め所に行く（写真④参照）。出勤の確認、そこで指示を受け、3～4人のグループに分かれて、現場へ。作業は午後2時頃に終わる。一日に清掃するのは、場所にもよるが、約1kmほどである。市長から、道の上にあげたゴミは、すぐ片づけるようにときつく言われているので、長くは放置しない。グループは、おおむね固定されており、イスラム教徒もいるが、仕事の上では、何も問題もなく仲良くやっている。間に1時間の休憩がある。仕事はシフト制になっており、続けて2シフト働くと、つぎの日は休みになる。一日の作業が終わっても、汚れた手や体を洗うシャワーなどの設備はなく、現場近くの池や水道で、体を洗う。チップをもらうと、皆で近くの店でお茶を飲んだりする。以前は、そんなことはしなかったが、イスラム教徒の人たちも一緒に働くようになってからは、店で差別されるようなこともなくなった。

写真④ 路上清掃作業を行う労働者

DLさんの給料は4400Tkで、家賃として1300Tkが天引きされる。それにローンが1700～1800Tk、それらを引くと、手元に残るのは1400Tkほどである。これでは生活できないから、副業として民間のトイレの清掃を行っている。

BSCのほとんどの人は、民間のトイレの清掃をしている。前回の調査で、まとまった数字として出てこないのは、副業的な形態だからである。トイレの清掃を請け負う専業的な業者や親方のようなものは存在しない。依頼主は、直接BSCにやってきて仕事を頼む。居合わせたものが、話を聞く。トイレが詰まって流れないとか、パイプに問題があるとか、浄化槽の清掃とか、依頼の内容を聞いて値段を決める。問題の箇所や、何人の人手が必要なのか現場を見ないと分からないときは、現場の状況で判断する。仕事にとりかかって、手に負えなくなると、できる人を呼びに来ることもある。

かなり前近代的、職人的形態でやっている。広告で宣伝し、電話で注文を受けるというような業者はいないのかと尋ねても、質問の意味をなかなか理解してもらえない。「今のままで、うまくいっている。依頼も沢山くるから、わざわざそんなことをする必要はない」という。

公的にはトイレの清掃担当の市労働者はいないということであるが、BSCで顔なじみのMLさんは、BSC地区内のトイレを担当しているという。市の常雇の労働者で、勤務は朝の5時から8時間労働である。担当の場所は2～3日で代わる。彼は、民家の浄化槽の清掃を頼まれてやってきたところだという。請負金額は、1000Tkから1200Tk、臨時収入にしてはなかなかのものである。

BSCのトイレは、UNDPのプロジェクトにより新設工事中で、現在は仮設のものが南端の側溝をまたいで作られている。

7-3 浄化槽清掃車の導入

BSCの労働者の話では、民間の浄化槽の清掃は、それまではこちらで個人的にやっていたが、今は市が直接依頼をうけ、市が作業の指示をする。以前はいい稼ぎになったのに、今はそれがなくなったと不満をいう。5時以降の勤務時間外の仕事も、市の指示で行う。特別な手当は出ないが、その分の代休がもらえるだけの話だという。

市が直接、浄化槽の清掃を請け負うようになり、それが民間部門のトイレ清掃の仕事を奪っているという説について、市の管理部長に聞いてみた。

市は5～6年前に、浄化槽清掃車（Septic Cleaning Lorry）を導入した。依頼がくると、担当者が現場を訪れ、容量や作業の難易度をみて料金を算出。130立方フィートにつき1000Tk。しかし、教育機関や宗教施設の場合には、700Tkに減額。もし、従来の人力でやるとすると、130立方フィート、3000Tkになるだろうという。市に置いてある所定の申し込み用紙に記入して申し込む。利用者は、事業所、賃貸住宅団地などである。稼働状態はよくない。月に15～20ヶ所の清掃をするだけである。収入よりガ

ソリン代、人件費など支出の方が上回っている。少なすぎる出動回数に疑問を投げかけると、かなり大きな車なので、細い道は入れないのが理由だという。まだ市内の需要の5%を請け負うにとどまり、とうてい民業を圧迫している状態ではないという。浄化槽清掃車というものが、どのようなものか見に行った。日本のバキューム・カーのようなものを想像したが、市保有の古い車を再利用した自作のもので、屎尿をいれるタンク車と吸引するポンプ車が別々になっている（写真⑤参照）。かなり旧式のもので、どれぐらい吸引力があるのか分からない。現在、1台のみで、古いタンク車がもう1台ヤードに放置されていた。車からみると、決して民間業者を圧迫するようなものではない。

写真⑤ 浄化槽清掃のためのタンク車

8 イスラム教徒との競合

4地区、どこを回ってもリーダーたちから、「失業問題を解決してほしい、臨時雇を常雇にしてほしい」という市長に対する強い要望がある。「臨時雇いだと、3日も病気で仕事を休むと、もう別のイスラム教徒の人が仕事についており、もう来なくても良いといわれる。イスラム教徒の人たちは、賄賂をはらって、仕事に就いている。われわれは賄賂をはらわないから、仕事がなくなる」と、イスラム教徒に仕事を奪われているという危機感がある。しかし、仕事の現場では、「差別はない。作業班もイスラム教徒と一緒に混じっているし、仲良くやっている」という。

常雇というポストを得るために、賄賂が支払われているとハリジャンたちは堅く信じているが、保健局管理部長は、「そんなことはない。賄賂を払ったという人がいるのなら、連れてこい」と強く否定している。現市長になってから、常雇の新規採用はないというのがその言い分である。

実際に、2000年2月から2002年1月にかけて市雇用の清掃労働者はどのように変化しているのだろうか。表3は、2000年の実数とその後の増減を示したものである。

1）清掃労働者の総数は、2000年の1,728人から2002年には128人増加し、1,856人となっている。しかし、その内訳は、常雇が109人減少し、臨時雇が237人増加。常雇を減らす政策がとられている。保健局管理部長は「臨時雇はよく働くが、常雇になればよく休むようになり、まじめに働らかなくなる」という。常雇は、おそらく定年退職などの自然減によるものだろうが、その後の補充は常雇でなされず、臨時雇でまかなわれている。当然のことながら、労働者側からの不満が出てくる。

2）この変化には、エスニック・グループ別の差があるのだろうか。清掃労働者のうち、イスラム教徒の比率は2000年では37.1%。2002年では34.8%であり、やや減少。逆にヒンズー教徒はその分だけ増加している。実数では、イスラム教徒は121人の増加。常雇の数は、ヒンズー教徒、イスラム教徒はともに減少している。この数字を見る限り、

「イスラム教徒は賄賂を払って常雇になっている」という噂は、デマである可能性が高い。臨時雇については、イスラム教徒の場合は、常雇の減少分を補う程度の採用であるが、ヒンズー教徒の場合は、常雇の減少分の2.7倍の臨時雇を獲得している。

3）イスラム教徒の常雇率は、50.1%から、44.0%へと減少しているが、ヒンズーの常雇率は、前回の46.9%から36.2%と大幅に減少している。そこだけに着目すれば、「常雇になるのが厳しくなってきている」という印象をもつのもあながち的はずれではない。

表3　2000年から2002年にかけての市雇用清掃労働者数の変化

	ヒンズー教徒	増減	イスラム教徒	増減	仏教徒	増減	計	増減
常雇	509	−73	321	−37	1	1	831	−109
臨時雇	576	194	320	42	1	1	897	237
計	1,085	121	641	5	2	2	1,728	128

計は2000年、増減=2002年の数－2000年の数

9　おわりに

今回の調査で明らかになったのは、ヒンドゥー・ベンガリの存在である。彼らの出身階層がどのようなものだろうか。SCの内部で、あるいは清掃労働者の内部では、差異が強調され、それぞれにエスニック・アイデンティティをもっている。A.Asaduzzamanは首都ダッカの清掃労働者コミュニティを研究した著作を発表した[15]。その地区には南インド出身のTeluguとカンプール出身のKanpuriがいる。また、清掃労働者コミュニティの内部には、Andra Pradeshの地主階層出身のKapolu、農業労働者Malolu、皮革職人出身のMatkulu、果物の行商出身のChassaruluなどのサブ・グループがある。それぞれのグループ間の共食関係、結婚関係をめぐる規範と実態について興味深い分析を行っている。この研究は、われわれにチッタゴンにおける清掃労働者の分析にも貴重な視座を与えてくれるものである。

今までの私たちの調査では、チッタゴンのハリジャン・グループの中にはサブグループはないようである。しかし、SCにはハリジャンだけでなく、ヒンズー・ベンガリ、さらに少数ではあるがイスラム教徒も生活している。彼らの相互関係はどのようなものであろうか。

一方、ヒンズー・ベンガリと一括して呼ばれている人たちでも、出身階層はさまざまに分かれている可能性もある。上で紹介した3人のヒンズー・ベンガリのハリジャンに対するそれぞれの対応の違いも、出身のジャティが反映しているのかもしれない。そうではなく、個人的な価値観やパーソナリティによる違いかもしれない。

私たちが、SCの住民を単一的なグループとしてみていたが、それはあまりにも単純化したものであって、実際はさまざまなサブ・グループに分かれている。ヒンズー・ベンガリがSCでハリジャン・グループと共に暮らしている現実がある。そのようなヒンズー・ベンガリを、外部社会はどのように見、どのように扱っているのだろうか。清掃労働という職業に対する差別、ジャティや出身階層に対する差別、さらにSCという地域に対する差別、市に雇用された安定的な地位に対するねたみなど、さまざまな要素が入り混じっているだろう。ハリジャン、ヒンズー・ベンガリ、イスラム教徒の三者は、清掃作業の現場や日常的な付き合いレベルでは友好的なものである。だが、常雇というポスト

や従業員住宅をめぐっては潜在的には厳しい対立関係が生じる可能性は高い。また、4つのSCの間で今後とも連帯関係が形成されるのか、それとも競争関係になるのか予断を許さない。また、今日のハリジャンとイスラム教徒との関係、ヒンズー・ベンガリとの関係のありかたは、ハリジャンの差別からの解放のプロセスにどのような意味をもっているのだろうか。解明すべき課題は多い。

【注】

＊ Michihiko Noguchi　大阪市立大学人権問題研究センター教授

1）この調査は、2002年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究課題「バングラデシュにおける清掃労働者の研究（課題番号14310089）」（研究代表者：野口道彦）によるものである。

2）イフティカルU.チョドリー博士は、チッタゴン大学大学院社会学部長の要職にあるにもかかわらず、連日調査に関わっていただき、彼の協力なしにはこの調査自体が成り立たなかった。

3）BSC、JSC、MSC、FSCは、それぞれAnderkilla区、Jhoutala区、Madarbari区、Fringhee Bazar区にある。

4）Kaledaさんは、チッタゴン大学大学院社会学修士課程、Anisさんは経営学修士課程を修められた優秀な青年である。

5）4地区とも、キリスト教に転宗しているものはいない。また、市の清掃労働者中にもキリスト教は皆無であった。

6）歴史的な人名をのぞいて、被調査者の固有名詞は、匿名化した。

7）イスラム教徒は一世帯のみ、その家族とはうまく付き合いができていないようだ。

8）ダリッド運動にはさまざまな系譜があるが、注目されるのは1992年に結成されたDalit Solidarity Programmeの活動である。その全国委員会のメンバーの構成はヒンズー教徒13人、仏教徒12人、イスラム教徒2人、シク教徒2人と諸宗教を越えた統一組織となっている。桐村彰朗訳「ダリッド連帯プログラム報告」『奈良法学会雑誌』11巻1～4号、1998～99年

9）4つのSCを束ねる組織の名前は、Chittagong Harijan Oikaya Parishad（ハリジャン地区連合会）である。

10）Shebokは、ベンガル語でサービスをする人、世話をする人という意味。チッタゴン市長ABM Mohiuddin Chowdhuryは、清掃作業員をShebokと呼ぶように提唱。野口道彦「バングラデシュの清掃労働者地区の社会階層的位置」『人権問題研究』No.2,2002年、3月

11）BSCで2000年2月に172世帯を対象に実態調査を行った。そこでジャティを聞いているが、「ハリジャン」は164世帯（95%）、「ダス」としたのは7世帯（4%）、不明が1世帯であった。また父の生誕地がSC以外のものは57世帯、母の生誕地がSC以外のものは53世帯（父、母ともに生誕地がSC以外のものは43世帯）であった。

12）前回調査のときに大学院生によって作成してもらった地図にはその住宅棟は記載されていない。つまり、前回の実態調査の調査対象の対象外とされたところだ。

13）BSCのリーダーのCLさんもBKDさんも、その後はこのトラブルを蒸し返し問題にすることはなかった。

14）野口道彦、前掲論文、2002年

15）A. Asaduzzaman, The 'Pariah' People, 2001